Emotional Treatment 尺度作成の試み
― Bion のコンテイナーコンテインドモデルを基にして―

特別支援教育・臨床心理学コース 臨床心理学専修
佐藤　麻衣子

1. はじめに

情動の認識困難は様々な心身の健康に関わることが指摘されており（Taylor et al., 1992 など），心理臨床場面における情動と心身の健康との関連性に注目が集まった。その後，学童期～青年期の児童に対する感情研究へと拡がり（小林，2004; 黒崎，2009 など），学校における心理的支援において子どもの感情認識が重要であるという指摘が多くみられるようになった（大河原，2004; 大対他，2007）。その中でも岩倉（2013）は，Bion のコンテイナーコンテインドモデルを学校現場における問題の対処の方法に置き換えて再考している。このモデルは①わけのわからないもの（原始的な感覚や情動）が投げ込まれ，②投げ込まれた器となる人に受け止められ，③「考えられ，耐えられる，取り扱い可能な形で返される」ことで，④情緒を扱えるようになれるという過程を意味する（Bion, 1961）。 学校現場では生徒のもつ理解できない気持ちに対し，それを受け止め，更にそれが何であるかを考え，伝え返していくことが求められているという。更に，大塚・小久保（2013）は，このモデルを用い，学校の非行問題との関連を述べている。このように，Bion のモデルを活用し，児童が情緒をどう扱っているかを考えることは有用であるが，実証的な研究は未だになされていない。そこで本研究では，自分の情緒をどのように扱っているかを測るため Bion のコンテイナーコンテインドモデルに基づいた Emotional Treatment 尺度を作成することを目的とする。先述したモデルに基づいた①～④のような過程が見られることを仮説とする。

2. 方法

調査方法 2016 年 2 月及び 5 月に関東の中学及び高校で，中高生 290 名（男子 167 名，女子 123 名；M=14.9, SD=1.48）に個別記入式の質問紙調査を実施した。調査は，約 15 分間でクラスの担任によって集団法で行われた。

質問紙の構成 ①フェイスシート，② Emotional Treatment 尺度候補項目：予備調査を行い，「行動的に情緒を発散する状態」，「重要な他者の有無（想定した人物と理由を自由回答法で記入してもらった）」，「他者による気持ちの意味づけ」，「自分で気持ちを処理すること」の 4 因子 60 項目を作成した。「1. 当てはまらない」から「5. 当てはまる」の 5 件法であった。③日本語版 EAQ 尺度：石津・下田（2013）が作成した尺度の中から，「情動の分析」，「情動の識別」，「情動の言語的伝達」を用いた。③抑うつに耐える力尺度：近藤・岡本・白井（2008）が作成した 14 項目 5 件法の尺度。

3. 結果と考察

Emotional Treatment 尺度候補項目について探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ，「他者による意味づけの獲得（気持ちを受け入れ，わかりやすく意味づけして伝え返してくれる他者がいる状態）」，「行動的発散（わけのわからない情緒を発散している状態）」，「自己省察（自分で気持ちを理解し，伝えることができる状態）」，「他者による受容の獲得（受容してくれる他者がいる状態）」の 4 因子が抽出された。中高生の情緒の取り扱いには，先述したような Bion が提唱した①～④の過程が見られるということが示唆された。今後は，尺度の精緻化，男女差及び学年差の検討を通して，本研究を発展させ，学校現場における一助としたい。

主要参考文献

Bion, W.（1961）. *Experiences in Groups and Other Papers.* Tavistock Pablications.